

異文化接触における高校生と留学生の“Agency” —異文化体験の現場で教育者は何を作り出すべきか—

広島大学森戸国際高等教育学院 恒松直美

はじめに

本稿では、日本の大学の交換留学生と地域高校生の異文化間能力育成を目的として実施してきた国際教育交流に焦点をあて、留学生と高校生の国際教育交流を企画・実行し、司会進行した体験と参与観察に基づき、留学生と高校生との異文化間インタラクションと関わりについて“agency”（エージェンシー）¹に焦点をあて考察する。2014 年度から開始されたグローバル人材育成プログラム 120「吉舎おもてなしプラン」の国際教育交流の発展の過程において、筆者は高校生と留学生との意義ある異文化体験の場の構築を目指し、段階的に発展させてきた。その発展の過程で目指してきたものは、学習者の“agency”の行使であったように思われる。異文化接触を意義ある場とするために何を目標としてきたのかについて学習者の“agency”の観点から振り返る。

グローバル人材育成プログラム 120「吉舎おもてなしプラン」は、広島大学と広島県立日彰館高等学校との協力により、2014 年より 2023 年 11 月まで 10 年にわたり継続してきた。その間、広島県立日彰館高等学校と広島大学短期交換留学プログラム（Hiroshima University Study Abroad Program, HUSA）²留学生・広島大学学生との国際教育交流と異文化間能力育成研修の場として、本国際教育交流事業を改善を重ねつつ発展させてきた（恒松 2021, 恒松 2022, 恒松 2023a, 恒松 2023b）。本国際教育交流事業の実施は 2024 年度で 11 回目となり、そのうち筆者が日彰館高校を訪問しての開催は 8 回、オンラインによる実施は 2 回となった。自身の教育者・研究者としての役目は、留学生と高校生の双方から相互の文化への興味を喚起し、英語と日本語の使用と共感の場となるサード・カルチャー（“third Culture”）を作ること（恒松 2023b）、留学生と高校生の異文化間インタラクションを起こし参加者をつないできたことであろう。本稿では、その異文化接触の体験学習の場が持つ意味について“agency”の視点から考察する。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行（パンデミック）の期間中も、広島県立日彰館高等学校と筆者は、本国際教育交流が継続できる形を模索し、ハイブリッド形式で継続した。2020 年と 2021 年度は、日彰館高等学校のある広島県三次市吉舎町・筆者と一部学生がいる東広島市にある広島大学・待機中の留学生のいる世界各国をオンラインでつなぐハイブリッド形式による国際教育交流を実施することとなった。200 名を超える高校生と高校教員及び地域の方々・地域の中学生・海外の留学生・広島大学で司会進行をする筆者をオンラインでつなぐという前代未聞の試みとなった。海外にいた留学生は、各学生が自国で日本への入国を待っていたため、高校生の「吉舎にいても世界とつながれる」の描写の通り、北

¹ 本稿では、“agency”の英語での意味をそのまま伝えたいとの筆者の意向から英語で使用する。

² 以後、「広島大学短期交換留学プログラム(Hiroshima University Study Abroad Program)」を「HUSA プログラム」と称する。広島大学は、北米・ヨーロッパ・オセアニア・アジアの 34 か国の 117 大学及び USAC (University Studies Abroad Consortium)と UMAP (University Mobility in Asia and Pacific)の 2 コンソーシアムと協定を締結し、これまで 1058 名が参加している(2024 年 6 月時点)。HUSA プログラムは 1996 より開始され、毎年約 40~60 名の留学生が「HUSA プログラム交換留学生」として広島大学に 1 年間または 1 学期間留学している。

米・ヨーロッパ・オセアニア・アジアをオンラインでつなぐ交流となった。

本国際教育交流事業は、対面・オンライン・ハイブリッドの3つの形式による国際教育交流を実現させた(恒松 2021, 恒松 2022, 恒松 2023a, 恒松 2023b)。本国際教育交流は、2つの側面から類を見ない体験を高校生にもたらしってきたと考える。第1点目は、準備された英語スピーチを読む等の準備したものをそのまま発表したり、受け身で話を聞く等の国際教育交流とは異なり、多国籍の留学生がいる現場で考え行動し、対話することが求められる多くの場を設定してきた。それは、決して準備をしないという意味ではない。準備を十分にしたうえで「現場で容赦のない異文化間インタラクションに挑戦する」ことを意味する。それも、北米・ヨーロッパ・オセアニア・アジアの世界各国からの多文化を背景とする留学生と直接対峙する体験である。日本の高校生が海外の留学生と高校生時代に関わる新しい体験は、生徒にかなりのインパクトを与えてきた(恒松 2022)。第2点目は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的流行(パンデミック)の期間中も途切れさせることなく、対面からハイブリッド形式に切り替えることで、大規模な国際教育交流を世界をつないで実施を継続したことである。この体験は、意志があれば世界をつなぐことが可能であることの実体験を高校生と留学生にもたらしした。

グローバル人材育成プログラム 120「吉舎おもてなしプラン」国際教育交流と異文化間能力育成研修

本国際教育交流は、2014年にグローバル人材育成プログラム 120「吉舎おもてなしプラン」の一環として、広島県立日彰館高等学校の高校生と広島大学短期交換留学プログラム(HUSA)留学生との国際教育交流及びホームステイ事業として立ち上げられた。2014-2015年度のHUSAプログラム留学生の来日直後に開催されるオリエンテーションにおいて、日彰館高等学校の生徒が「吉舎おもてなしプラン」国際交流事業についてプレゼンテーションを行う場を筆者は設けた。その後、自由意思で高校生と留学生と一緒に昼食をとれる時間を設定することで相互の親睦が深まるようにした。2014年から2019年までは、広島大学短期交換留学プログラム(HUSA)留学生が本事業に参加できるよう支援した。その後、2020年度からは筆者の授業“Glocal Internship: Intercultural Competence in Japanese Society”(「グローバルインターンシップ: 日本社会における異文化間能力」)と”Japanese Society and Gender Issues”(「日本社会とジェンダー」)の受講生のフィールドワークとして参加する形態にして2024年度まで継続してきた。

2014年度から2019年まで対面で開催し、2020年度と2021年度は、吉舎・広島大学・海外をオンラインでつなぐハイブリッドの形式で実施した。学校内では、対面の参加者とオンラインの参加者が存在した。2022年度から再び留学生が日彰館高校を訪問し、「異文化間能力育成研修」及び『「吉舎おもてなしプラン」国際教育交流』として対面で実施している。前述した通り、2022年度から広島大学からの参加者は筆者の2つの授業の受講者となったことから、本事業への留学生の関わり方も変化した。授業の一環として参加する形にしたことにより、全体会のみでなく、各教室での交流において、高校生の日本文化紹介のみでなく、留学生も主導的にプロジェクトを実施する形態とした。広島大学からの参加者は、主にHUSAプログラム交換留学生・総合科学部国際共創学科(Department of Integrated Global Studies, IGS)の学生であるが、IGSに所属する日本出身の学生や大学院人間社会科学研究科の大学院生も受講している。2024年度は、「国際協働学習を通じて醸成するアジャイル・アントレプレナーシップ」プログラム(“Agile Entrepreneurship Development Program through International Collaborative Learning”)のインド出身の留学生と「キャンパスアジア」(“Campus Asia”)プログラムのインドネシア出身の留学生も受講した。地域学校・行政・企業と関

わる体験学習を魅力として受講する留学生の幅が広がっている。

現在、「グローバルインターンシップ」の受講生は、授業における「実習」として本事業に参加している。各教室での交流において「留学生と日本の高校生の異文化間インタラクションを起こす方法」と題してグループプロジェクトを企画し、当日、高校において実践を行う。実践を通じ、日本の地域の高校生と関わる場を持つ。「日本社会とジェンダー」の受講生は、2022年度と2023年度は、ジェンダーに関する質問を用意し、高校生に質問して日本の学校のジェンダーに関する課題について理解を深めるとともに学校現場も観察した。2024年度は「教育とジェンダー」と題し、各国のジェンダーの問題について英語のプレゼンテーションを各グループが行った。高校生にはレベルが高いため支援の施策を要する。留学生と高校生が実践プロジェクトにより異文化接触を体験したり、共にジェンダーについて学ぶ教育の場を創ることで、大学生と高校生が相互に学べる国際的体験学習の場を構築してきた。

国際教育交流全体会・クラス交流・吉舎街歩きガイドツアーにおける異文化接触

2024年度は10回目となり、広島大学の学生が日彰館高校を訪問して対面で実施した。広島大学からは、アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、オランダ、タイ、ベトナム、インドネシア、インド、フィリピン、中国、香港、台湾、日本出身の学生38人が参加した。日彰館高校からは高校生221人が参加し、計259人の学生が参加する大規模な国際教育交流となった。第1部の国際教育交流では、表2に示したように、中国と台湾からの留学生によるスピーチ、グループワークや絵カードを使用したクイズを行い、筆者の英語と日本語による司会で留学生と高校生の双方からの異文化間インタラクションを起こす場を創った。2024年度のスピーチは2人とも日本語上級者であったことから日本語で行った。これまでの高校生のアンケートから、留学生が外国語である日本語を話す姿は、高校生に自身の外国語学習の態度や異文化体験を再考する機会をもたらしていることが分かっている。留学生が日本に興味を持ち日本語を話そうとして高校生に歩み寄る姿は、高校生が、自身も留学生のように外国語を学び、相手のことを理解すべきであり、実際に話せるようになりたいと実感する体験をもたらしてきた。

全体会において、北米・ヨーロッパ・オセアニア・アジアからの留学生に一度に会う体験は、高校生には稀有の体験であり、留学生の反応が予測不可能と感じる全く新しい体験である。留学生側も日本の高校生との大規模な国際教育交流は初めてである。2014年4月に呉市立倉橋中学校において14か国出身の25名の交換留学生が参加する数百名の大規模な国際交流会を開催した際、中学校生徒の一人が、「一生に1回くらいの経験ができたことに感動した。そして、たくさん前に出て伝言ゲームができたことが嬉しかった」と述べた通り（恒松 2015）、高校生には、40名を超える留学生との出会いは、一生に1回と思うほどの衝撃的な体験である。高校生の1学年から3学年まで参加する全体会では、上の学年の生徒のほうが、過去の体験から、より留学生と関わろうとする態度が見られる。高校1年生の場合、全く経験がないことから、留学生とどのように会話を始めてよいか分からず、自己紹介のセッションで何も話そうとしない様子も伺えた。コミュニケーションの可能性を探る意味で相手の言語能力をまず確かめる、という行為自体も、異文化体験のない高校生には大きなハードルである。サード・カルチャーを留学生と創り出すことも、経験がない場合困難である。世界各国の留学生と直接対面して対話する体験は、驚き・恐れ・戸惑い・衝撃などが入り混じった新しい体験であることを教育者が理解する必要がある。テーマ設定をして向かい合えば、また、共通のコミュニケーション言語があれば、異文化圏からきた相手との対話が成立するわけではない。

第2部の各教室でのセッションでは、表3に示したように、高校生による日本文化の紹介と広島大学学生のプレゼンテーションを実施した。2024年度は、「グローバルインターンシップ」と「日本社会とジェンダー」の両方の受講者がグループプレゼンテーションを行う企画とした。第1ラウンドでは、まず、高校生が日本文化紹介を行い、続いて、広島大学学生のプレゼンテーションとした。「グローバルインターンシップ」の受講者は、「留学生と日本の高校生の異文化間インタラクションを起こす方法」をテーマとしたプロジェクトを実践した。「日本社会とジェンダー」の受講者は、「教育とジェンダー」をテーマとして自身の国の教育におけるジェンダーの課題等について調査し、グループでプレゼンテーションを行った。第2ラウンドは広島大学学生のプレゼンテーションのみとした。クラス交流における高校生と広島大学学生の異文化間インタラクションについては、“agency”の視点から後ほど考察する。

第3部の吉舎の街歩きでは、例年通り、5～6人のグループを作り、高校生による町の歴史や文化の紹介とガイドをもとに、高校周辺を高校生と広島大学学生が一緒に歩いた。高校生との街歩きは、留学生から大切な思い出としてよく語られる体験である。全体会と教室での緊張感の伴うプロジェクト実践の後、リラックスした雰囲気の中で自由に語り合いながら町を歩いたり、神社を訪問したりする体験は、留学生と高校生の双方にとり「人」としての関わり合いの時間となっている。同時に、一緒に歩いた高校生が興味を示さず話も進まなかったとの留学生の声もあった。インタラクションが起こらなかったケースについては、表に見えない要因も含め、なぜ興味が喚起できなかったのかなども含め、今後考察していく必要があると考える。

表1. 2024年度 国際教育交流会・異文化間能力育成研修のスケジュール (2024年11月9日)

10:30	日彰館高校到着 Arrival at Nisshokan HighSchool
11:00-11:45	全体会（体育館） InternationalExchange (All School)
12:00-12:50	クラス交流（各 HR 教室） Classroom Activity
12:50-13:40	昼休憩（多目的教室） Lunch Break
13:45-15:20	吉舎街歩きガイドツアー Guide Tour in Kisa
15:30-15:50	お別れ式 Farewell Ceremony
16:10	出発 Departure



表2. 国際教育交流会(全体会)の内容

11:00-11:10	留学生による自己紹介 (10分) * International Students' Speech
11:10	グループアクティビティ (全体) (35分) Group Activity
(1)	グループ内で自己紹介 (10分) [11:10-11:20] Self Introduction in Each Group
(2)	留学生・高校生に関する質問 (10分) [11:20-11:30] Questions to Students
(3)	絵カードを使用したクイズ (15分) [11:30-11:45] Quizzes – Using Pictures



表 3. クラス交流（各クラスにおける日本文化紹介と留学生の実践プロジェクト）

<p><1st Round 1 ラウンド></p> <p>(1) 高校生から自国文化の紹介 (15 分) [12:00-12:15]</p> <p>Introduction of Japanese Culture (High School Students)</p> <p>(2) 留学生によるプロジェクト/ 質疑応答 (15 分) [12:15-12:30]</p> <p>Project of Hiroshima University Students</p>	
<p><2nd Round 2 ラウンド></p> <p>(1) 留学生によるプロジェクト/ 質疑応答 (15 分) [12:35-12:50]</p> <p>Project of Hiroshima University Students</p>	

表 4. 「クラス交流」スケジュール（留学生プロジェクト実践・ジェンダー調査発表）

Class (高校生)	1 (1 年 1 組)	2 (2 年 1 組)	3 (3 年 1 組)	4 (1 年 2 組)	5 (2 年 2 組)	6 (3 年 2 組)
12:15- 12:30 第 1 ラウンド	Internship Group 1 (Internship Group 4 観察)	Internship Group 2 (Internship Group 5 観察)	Internship Group 3	Gender Group 1 (Gender 4 観察)	Gender Group 2 (Gender 5 観察)	Gender Group 3
12:35- 12:50 第 2 ラウンド	Gender Group 4 (Gender 1 観察)	Gender Group 5 (Gender 2 観察)	Gender Group 3	Internship Group 4 (Internship Group 1 観察)	Internship Group 5 (Internship Group 2 観察)	Internship Group 3

異文化間インタラクションにおける留学生と高校生の“Agency”と“Autonomy”

今日のグローバル社会の多文化環境における学生の“agency”の重要性を Luong, et al. (2023)は指摘する。本グローバル人材育成プログラム 120「吉舎おもてなしプラン」の国際教育交流事業の企画を発展させる過程で筆者が体現しようとしたのは、高校生と留学生が主体として“agency”を行使することであり、高校生と留学生が自らの意志で決定し行動する主体的能力（“agentic capacities”）（Bandura, 2018)の発揮と成長であった。学生の“agency”とは、学生が主体として行使する能力と、大学・教室などの環境における決定要因の相互的作用による産物である（Bandura, 2018; Luong, et al., 2023）。つまり、主体と主体のおかれた環境との相互作用により“agency”が発揮される。高校生と留学生の異文化接触では、双方の主体とその主体が力を発揮できる教育的示唆のある異文化環境の相互作用が“agency”を作動させる。

Jääskelä, et al. (2020, p.2)は、“agency”と“autonomy”の双方とも、個人が自身の学びをコントロールする能力や要望を包含するとの Benson (2013)の見解に言及し、“agency”と“autonomy”が並列的な概念であると述

べている。また,Hasselberger (2012, p.257)は,“agency”を「自発的,または自ら設定した目的に向かう行動をおこす力」と定義し,自身の見地に基づき自身の生き方を決める自身による“agency”の明確な発揮を“autonomy”としている。Hasselberger (2012, p.255-256)は,自身を言葉で表現し,自身の見解と行動を構築する心理の中にある動機付けを態度で示す自主的な主体 (“autonomous agency”) について提示している。留学生が自身の文化アイデンティティをもとに “autonomy”を保ちつつ,高校生と関わる案を考案し,自らの意思で表現し高校生と関わる「留学生と日本の高校生の異文化間インタラクションを起こす方法」を実践した実習はこの“autonomous agency”が発揮されたケースである。

日彰館高校における本国際教育交流を 10 年に亘り継続したことは,その意義づけとともにその文化を継承する意志が学校内で育まれてきたことを意味する。高校においては,前例を積み重ねて異文化体験の教育事業の導入を一つの文化として作り上げたことで,異文化接触の体験を前提とした教育環境が作り出されてきた。その環境の中で,生徒の間には,留学生と関わる場で主体として行動し接するための準備が必要であるとの認識が生まれてきたことが想定できる。筆者が司会進行する国際教育交流においては,高校生と留学生が,受け身の姿勢で参加し観察するのではなく,自ら考え,発案し,動き,その体験をリフレクションする場を作ってきた。学生が自身の“agency”を自ら行使する主体的体験である。Biesta & Tedder (2007, p.132) は,“agency” は,「所持しているものではなく,個人が行動する文脈を自ら想定し積極的に行動し達成するものである」と主張する。筆者は,高校生と留学生の異文化接触の現場において,学生自身が現場で実際に行動を決定し,行動して何かを伝える,自身の“agency”を行使する実習を行ってきた。目の前に対峙する異文化圏の相手に対し自ら考えて決定し行動したと思える体験が,次の agency の発揮を引き出す。

2014 年度からの発展の経緯について“agency”の視点から振り返ってみたい。2014 年開始のグローバル人材育成プログラム 120「吉舎おもてなしプラン」開始から 10 年の間に,留学生・大学教員・高校教員・高校生・地域社会の関わり方も変化した。2020 年から学生交流に多大な影響を与えたコロナ禍により本国際教育交流にも想定外のことも起こった。2020 年度と 2021 年度は,コロナ禍により留学生が日本に入国できず国外待機となる中,オンラインで世界各国で待機する留学生・日本の高校・大学をつなぐ大規模な国際教育交流を開催した。オンラインでの実施により,中学校と小学校の生徒,ホームステイのホストファミリーとして留学生を迎えた地域の方々もオンラインで大学と世界の留学生とつながるグローバルなスケールでの開催となった。対面による開催と異なる点も浮き彫りとなった。

2014 年に広島大学短期交換留学プログラム交換留学生に本「吉舎おもてなしプラン」に参加してほしいとの要望があった際,プログラム担当教員として,来日直後の留学生オリエンテーションにおいて高校生が本事業の紹介プレゼンテーションをする場を設けた。高校生が留学生と絆を深められるよう,一緒に昼食をとりながら交流する時間を設けた。本事業は,当初,高校生が留学生をもてなす企画として実施され,招聘される留学生はもてなされる顧客の立場であった。国際教育交流事業を成立させるため留学生に参加してもらうことに主眼がおかれ,留学生の主体性は本事業の中に想定されていなかった。

2015 年度より「吉舎おもてなしプラン」の全体会において筆者が企画する国際教育交流を導入し,数百名が参加する場で留学生と高校生のインタラクションを起こす内容とした。高校生も留学生も「自ら考え動く」場の導入である。それ以降,2019 年まで改善を重ねていった。その 5 年間の間に全体会で筆者が目指していたのは,高校生と留学生の一人一人の“agency”を引き出し,各自が“agency”を行使する体験であったと考える。2020 年と 2021 年のコロナ禍でのオンラインと対面の場をつないだハイブリッド形式においても目指したものは同じである。2022 年から,再度,対面の形式に戻したが,以前の対面と比較して大き

く変わったのは、クラス交流において留学生が主体として“agency”と“autonomy”を発揮し、主導的に考え実践する実習を新しく導入したことである。筆者の留学生向け「グローバルインターンシップ」の授業の実習として、「留学生と日本の高校生の異文化間インタラクションを起こす方法」の実践を高校生との異文化接触の体験の中で行うこととし、本事業の現場で導入した。留学生が自身の異文化性を生かして“autonomy”を発揮し、“agency”を行使して日本の地域社会と関わる国際的体験学習の実践である。実習では、留学生が主体的に日本の高校生とインタラクションを起こす実践企画を発案し、授業でリハーサルを2回行い、筆者のフィードバックをもとに改善を重ねて実行した。

留学生が日本の高校生との異文化間インタラクションを起こす本実習において、留学生が自身の文化アイデンティティの揺らぎを感じつつも、その文化アイデンティティを発揮し、高校生とのインタラクションを起こす実践は、自身の“agency”を行使する体験でもある。来日して数か月の留学生にとり、予測不可能な日本の高校生の反応への対応は、“comfort zone”（快適領域）から出る挑戦的な異文化体験であり、日本人が留学生や外国人を特別扱いする「顧客としての留学生」（江淵, 1991）の体験とは異なる。「留学生顧客論」と平等主義をめぐる「統合主義」対「分離主義」（江淵, 1991）に関する議論や、アカルチュレーションモデル(Berry, 1992)と関連づけた留学生と高校生の自発性や自律性に関する分析（恒松, 2024）は、留学生と高校生の双方の“agency”を作動させる体験の意義を示唆している。筆者が述べた「容赦のない本物の体験・準備のない世界」とは、自身の知識を総動員して現場で対応する予測不可能な場面であり、多国籍の留学生が高校を訪問する本国際教育交流の原動力として筆者が体現してきたものである。「容赦のない本物の体験・準備のない世界」を前に、学生はこれまでの準備を力にして“agency”を行使する挑戦をする。

Bandura (2018)は、心理的機能における「行為主体性」や「主体的特性」として、先見（“forethought”）・自己反応性（“self-reactiveness”）・内省（“self-reflectiveness”）の3つの特性を挙げている。本事業で継承してきた日本の学校文化と異文化との出会いは、毎年、事前に高校生と留学生の双方が準備段階で異文化に対し先見を持つところから始まる。実際の異文化接触の現場で、実体験に対する自己の反応を体験し、その体験について内省する場を持つ。実践と理論について再考する場を持つことで、体験を相対化し捉え直して課題を認識し、次の課題と挑戦を可視化することができる。

結語

本稿では、日本の大学の交換留学生と地域高校生の異文化間能力育成を目的として実施してきた国際教育交流に焦点をあて、留学生と高校生との異文化間インタラクションにおける留学生と高校生の“agency”の意味について考察した。筆者は、留学生と高校生の双方が「主体」として関わることのできる異文化接触の場の構築を目指してきた。参加者が主体として関わる異文化間教育の実践への挑戦である。留学生が自身の文化パラダイムとは異なる文化に遭遇した時、教育的示唆がない場合、自身の文化パラダイムの中でのみ思考し対応する(Tsunematsu, 2023)現象は高校生も同じである。異なる文化パラダイムに遭遇した時、自身と相手の文化を相対化して見る教育的機会を持てるかが、その異文化体験を意味ある体験にできるかを左右する。教育的示唆は次の異文化接触における新しい目標につながる。一人一人の学生の“agency”を中心においた異文化体験の場を構築してきた意味を本稿で再考してみた。

参考文献

- Bandura, A. (2018). Toward a psychology of human agency: Pathways and reflections. *Perspectives on Psychological Science*, 13(2), 130–136. <https://doi.org/10.1177/1745691617699280>
- Benson, P. (2013). *Teaching and researching autonomy in language learning* (2nd ed.). Routledge. <https://doi.org/10.4324/9781315833767>
- Biesta, G. and M. Teder. (2007). Agency and learning in the Lifecourse: Towards an ecological perspective. *Studies in the Education of Adults*, 39 (2), 132-149. <https://doi.org/10.1080/02660830.2007.11661545>
- Hasselberger, W. (2012). Agency, autonomy, and social Intelligibility. *Pacific Philosophical Quarterly* 93, 255-278. <https://doi.org/10.1111/j.1468-0114.2012.01419.x>
- Jääskelä, P., Poikkeus, A., Häkkinen, P., Vasalampi, K., Rasku-Puttonen, H., & Tolvanen, A. (2020). Students' agency profiles in relation to student-perceived teaching practices in university courses. *International Journal of Educational Research*, 103, 2-14. <https://doi.org/10.1016/j.ijer.2020.101604>
- Luong, P. M., Tran, L.T., Nguyen, H. T. T., Ngo, N. T. H., Nguyen, T.T.M., Dang, G. H., & Nguyen, H. T. (2023). Student agency for intercultural adaptability in international programs: Insights into internationalization at home in Vietnam. *International Journal of Intercultural Relations*, 96. <https://doi.org/10.1016/j.ijintrel.2023.101855>
- Tsunematsu, Naomi. (2023). “Agency, autonomy, and power of international students in Interactions with local society in Japan through an experiential learning project. *COMPARE: A Journal of Comparative and International Education* 53 (7): 1170-1188. <https://doi.org/10.1080/03057925.2021.2017767>
- 江渕一公 (1991) 「在日留学生と異文化教育 – 研究の視点と課題」『異文化間教育』第 5 号, pp.4-20.
- 恒松直美 (2024) 「国際教育交流における高校生と留学生のアカルチュレーション – 日本の地域社会と異文化の「関り」の構築 –」『広島県立日彰館高等学校研究紀要』第 21 号, pp.46-53.
- 恒松直美 (2023a) 「留学生と地域高校生の異文化間能力育成における異文化間インタラクション – 「関り」が生まれる空間とその文化継承 –」『広島県立日彰館高等学校研究紀要』第 20 号, pp.43-50.
- 恒松直美 (2023b) 「留学生と高校生の国際教育交流におけるサードカルチャー体験：異文化接触とパラダイムシフト」『広島大学留学生教育』第 27 号, pp.28-42.
- 恒松直美 (2022) 「国際教育交流における“Third Culture” – 留学生の日本留学目的と高校生の異文化間能力をつなぐ –」『広島県立日彰館高等学校研究紀要』第 19 号, pp.31-38.
- 恒松直美 (2021) 「高校生と交換留学生の異文化間インタラクションの挑戦 – 異文化理解教育推進プログラム『吉舎おもてなしプラン』国際交流 –」『広島県立日彰館高等学校研究紀要』第 18 号, pp.51-64.
- 恒松直美 (2015) 「地方の中学校と留学生の異文化接触 – 地域に変革をもたらす交換留学生インターンシップ –」『広島大学国際センター紀要』第 5 号, pp.19-33.
- 恒松直美 (2005) 「日本社会における異文化理解：留学生の視点 – 国際交流 広島大学短期交換留学プログラム留学生日本語スピーチ発表会『広島大学留学生から見た日本』を開催して –」『広島大学留学生センター紀要』第 15 号, pp.37-62.

謝辞

広島県立日彰館高等学校と地域の皆様に心より感謝の意を表します。